

松村介石

——日本プロテスタンチズムの鬼子——

高 道 基

はじめに

明治期キリスト教の開拓時代を担った指導者群像について、概ね歴史的評価の定まった今日においてさえ、なお忘却の座に置かれている人々がある。松村介石などはその一人だろう。明治十七年、史上著明な高梁教会迫害事件の渦中牧師であり、「福音新報」「基督教新聞」の主幹として論陣をはった人物でありながら、一日王陽明「啾々吟」にふれて東洋的回帰ともよべる転回をなし、儒教的キリスト教を唱導し「道会」を組織して己んだ。自らは遂に背教の自覚を持つことがなかったが、その生の軌道は大きくキリスト教正統信仰を逸脱し、ただ「信神・修徳・愛隣・永生」の四綱領によって立ち、社会教育家としてユニークな活躍を行なうに止まった。

介石に対する論評の少なさは大体右のような事情によるものと思われる。しかし介石が大正十五年、当時の最大のキリスト教文書刊行書店「警醒社」に拠って出版した「信仰五〇年」及びその他夥だしい警世的文書を見ると、介石にも聊かの言い分があり、又それによって彼は戦前のキリスト教界に一種独特の市民権を保っていたように思える。

この小論はいわば彼の言い分を明治キリスト教の味わった苦惱又は陣痛の中で聞き分けるといふ、細やかな意図をし
か持っていない。

(一)

日本キリスト教の源流を、横浜・熊本・札幌の三つの結盟体^{バンド}に探り、そこに共通して存在した啓蒙意識を指摘することは、その後の指導性を含めて見ればきわめて妥当なことであろう。彼らの多くは封建教学によって養なわれた旧価値と、維新変革期に当つてのつびきならず当面した西洋、そしてそのimplicitな価値としてのキリスト教との二元相剋の中で、それ／＼独自の生の地平に身を投じた。その源泉的系譜から言えば介石は横浜のそれに属する人である。ただし初期ブラウン塾、又はバラ・ブラウン塾に併せ学んだバンド系の人々とは異なりバラ塾後期に学んだ彼は、横浜系統の人々の間では、いわゞ一匹狼的存在であり、のちに熊本バンドの教派となつた「組合教会」に接近していつた。当時としては珍らしいケースの一つである。その間の事情は、一つには宣教師バラ (J.H. Ballou) との衝突により、一つには彼自らの入信による回心後の志向に求められるだろう。

介石は明石の下級士族に生まれ(安政六年十月) 幼少時京都の市村水香の塾で漢学を修業、十二才にして東京に出て、明治九年バラの英学塾に入校、その聖書講解により「一夜忽焉^{コッ}として、人生の別天地、別乾坤を見る」^(注1)ことを得た。宗教心の著るしかつた少年としての介石は「爾来一切を神に献ずべし」と誓約、伝道者として立つことを決意する。十三才の時である。

苦学力行したが、天衣無縫の人物であつたらしく喧嘩三昧の「乱暴書生」と自ら書いている。しかし克己によりバラによつて教えられた「戒行」を守り、その塾長に選任された。彼がバラ塾について記述している部分を引く。

「予は己に神に我身を献ずと決心したものであつた。故にどんな事でも神の戒と聞いたら、何処までも之を守り通

したいと決心した。後で聞けば海老名君（彈正）や、宮川君（經輝）の様な肥後の熊本連や、内村君（鑑三）や、新渡戸君（稲造）の様な札幌の農学校連や、植村君（正久）や井深君（梶之助）の様な横浜連等は、予等に比すると、最初より余程自由的な基督教を伝えられたらしい。然し、バラ氏やヘボン氏の如きプレスビテリアン派に教養せられたる予等は、ナカ／＼嚴重なる戒律を守らせられたものであった。即ち日曜日には腕角力や、鞆韃や、鞠投げの如き遊戲をも禁ぜられた。又日曜日には如何なる事があつても、錢は一文も使うことを禁ぜられた。又或日曜日に一寸昼寝して居ると、バラ氏がやつて来て、昼寝は不可ぬ、日曜日には唯だ伝道と祈禱と聖書を読むの外、何事をも為してはならぬ、昼寝して居ると、其の懈怠に乗じて、惡魔が魂の裡に這入るぞ、と戒められた。又日曜日の朝教会へ行く途中の公園で、西洋人のベースボールをして居るのを見て居ると、バラ氏に見付られて、『アー此安息日を守らぬ不信者の行動を面白相に見て居るのは、己に其罪を犯して居るのと同じである』と戒められたから、予は一々固く其等の戒律を守つたのであった。^(注2)

バラは介石の将来に囑望していたらしい。学資支弁に困難を覚えた介石は、東京高等師範学校官費入学を志すが失敗、バラの紹介で小学教師をするかたわら、バラの聖書講義の通訳をなしている。しかし生活苦も重なつて「脳病」を患い、箱根に療養、一夕苦惱にもだえて祈禱中、烈しい天の「啓示」に接し、病の快癒を覚えると共に、一生十字架を負つて神の道を伝えんと決心、バラの下に帰つて築地神学校に入校、次いで築地大学の舎監に補任されている。天の啓示に接した日を介石は生涯銘記しているが、その日は明治十三年八月二十八日、介石二十二才である。

すでに成人した彼の目に映つた築地の学生たちは学力不案内の上に宣教師たちの一笑一びんに媚びる不徳義漢のように思へたらしい。その上嚴重な戒律主義によつて育つた彼の目から見ると、宣教師たちが行なう飲酒（ヘボン）喫煙（フルベッキ）に偽善を感じとり、次第に「洋人崇拜」を脱している。宗派の上に築かれた神学も亦、彼の批判の目を免れなかった。その上にダーウィニズムに触れて驚き、「預定」「特選」をはじめ従來の神学上の意見に懷疑を抱

き、次第に初期の模倣的信仰を冷却させている。

この時期、彼は先に述べた宣教師たちの人格問題に対する躰きも大きく手伝って、「今後宣教師とその神学に盲従せず」と決心しているが、さし当って彼はその師バラと大衝突をやってしまった。バラその人については井深梶之助が「天資熱烈」な伝道の人と回顧しているが、その性格の激越さに関して「或は熱心の余り思慮を欠いて判断を誤り又は人を誤解した場合もある」とその「負」の側面を記述している部分がある。^(注3)バラにかぎったことではないが、初期に來日したミッシヨナリーズの多くは本国において自由主義的潮流に對抗し、アメリカ建国の理想を継承しようとする old puritans の情熱と偏狭さを持ち、その神学はきわめて保守的、併せて他国の文化的伝統とその心情を理解しようとする柔軟さに欠けていた。介石はその思想の成熟と共に、バラと衝突するに至る。

「予輩も最初基督教を信じた時代には、一も二もなく宣教師の言う事を聴て居たが、段々と知識が進み、内情が分つて来ると、偉い所もあり、詰らぬ処もあり、難有い処もあり、あまり難有くない処もあるので、此れではとても日本に基督教を伝ふる事が六ヶ敷い、サツパリ日本人の性格が解つて居ない、察するところ矢張り日本人を支那人や印度人同様と思ふて居るやうだが、今に馬鹿を見るだろう。大きな体軀でエビシーとやつて居ると、先づ低能児の様に見えるだろうが、どうして此の日本の青年の胸中には、龍蛇を蟠まらして居るのであるに、其れが宣教師には解らないやうであると思ふから、予輩は幾度となく此の事に就てバラ氏に注意を促した。^(注4)」

「一日真面目になつて、バラ氏に面会し、今日までの恩義を謝すると同時に、今日の如く宣教師等が、我日本の学生をコックやボーイ同様に取扱つて居るならば、幾等教育しても、説教しても駄目である。彼等は決して信者とならぬと云ふ様な意味を談じたところが、ミセス・バラが傍に居て、英語で「アア、汝は悪魔に捉へられた」と云ひ、バラ氏は即座に、汝は何も言はずに、今日限り此学校（注、築地大学）を出てくれと言はれた。^(注4)」

放校された介石にとって最初の漂泊が始まる。和田健三や田村直臣の家に食客となり、発行間もない「六合雑誌」

(明治十三年初刊)の校正係をつとめたが、その間、彼の伝道者たんとする一念は微塵も揺らいでいない。外国伝道会社に依存しない自立独行の道を歩まんとして関西に下り、当時京阪神を中心に伝道の地歩を固めつつあった組合教会系の指導者に接触する。彼はその印象を次ぎのように録す。

「新島・松山(高吉)・宮川(経輝)の諸氏に会うて聞いて見ると、同志社に居るコングリゲーション派の宣教師などは、京浜地方に居る一致教会の宣教師などとは全く其の類を異にし、決して日本人を輕蔑することなく、殆ど爾我的交際をして居ると云ふのであつた。加えて實際二三の宣教師と会うて見て、其言の偽りならざることを知つた上に、京阪神の姉妹らが、皆大いに我輩を歓迎して呉れる様に思はれたから、少々我心の動いて居る所へ、金森君と会見したのである。」^(注5)

金森通倫、松山高吉の勸奨に動かされ、一文の金も宣教師の厄介とならぬ「独立独歩」の教会として高梁の教会に赴任を決意する。明治十五年十二月、介石二十四才の時であつた。

(二)

警醒社が明治四十二年、教界の指導者に依頼して編んだ『回顧二〇年』に介石は一文を寄せ、彼の入信の動機を次のように語っている。

「是は宗教の問題より寧ろ人格の問題で、我輩はキリスト教のために初めて自己中心の人物より国家社会の為に尽そうという人格となつたのである。こればかりでもキリスト教に感謝せねばならぬ。」^(注6)

維新の雄藩薩摩・長州の志士を衝きうごかした「治国平天下」の理想を、キリスト教によって得たと語っている条^{くだ}りである。これは熊本バンド系の人々のエートスとして指摘されるナシヨナリスチックな志向と軌を一つにしている。いずれも志士仁人^{ししにん}気取りで熱をもって相惹く、という俠氣が見えなくはない。

金森の熱情にほだされた形で高梁にやって来た介石は、明治十五年の後半期より、同十六年の前半期の一年の伝道で、十八人の信者数を百十八人に増加させている。

明治十六年は日本キリスト教史上、特異な精神靈動として記録されるリバイバル運動が教界を旋風のように捲きこんだ年にあたる。H・リッターの *A History of Protestant Mission in Japan* は、その起点を同年四月十六日の「大阪会議」におき、当日の会議は使徒行伝一章八節の「たゞ、聖霊があなたがたにくだる時、あなた方は力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」という主題聖句の下に祈禱の声ひきもきらず、各自熱烈な信仰復興^{イブ}を体験したとある。その熱気は会議終了后直ちに全国の教会に爆発的に拡大していった。^(注7) 岡山県下一帯にその熱気を伝えたのは同県出身の石原保太郎であったが、その熱禱にふれた人々を中心に、高梁教会にリバイバルの気がみなぎった。その靈動がこの地に潜在していた反キリスト教勢力の反感を誘発、ここに日本プロテスタント史上もつとも熾烈といわれる教会迫害事件（明治十七年七月）がおこることとなる。

明治十七年といえば、中央では狂気の西洋崇拜Ⅱ欧化主義の幕開きの時期にさしかかるが、中央に遠い地方では、依然として抜き難い「耶蘇」に対する反感が蟠まっていた。ことに高梁は島原の乱で幕軍につき、討死を遂げた板倉伊賀守の封を継ぐ旧城下町であり、キリスト教の伸張に対する嫌悪は、旧士族、地方官憲に根強くあった。彼らは、本願寺派、真言宗派らを問わず全ての寺院を結集して企てられた「破邪顕正」演説会の熱っぽい反撃ムードに便乗し、遂に民衆を煽動して直接教会堂襲撃の挙におよんだ。この時代のキリスト教が遭遇した迫害の集中的表現と見做されてよい。

事件は偶発的に惹き起こされたものでなく、元本願寺派の僧侶で当時この町の警察署長に在任の丹羽某により、計画的に策動されたものであり、動員された群衆による襲撃は前後二回に及んでいる。

一回の襲撃は七月下旬、当時同志社女学校校長藤田愛二の伝道会の席上に起こった。その状況は

「例の如く讚美歌を謡ひ、聖書を読み、祈禱を爲し、其れより藤田先生の説教となつたのであるが、その半途頃までは、何の気色も見えざりしに、驕^{おご}て変な風の奴が門に立つ哩^わ（当時会堂は開放していて、門前に聴衆を立たせて居た）と思うて居ると、次第／＼に其数を増し、最初の程は何だか批評がましき事を云つて説教を妨げて居たが、見る／＼中に、四方八方より群を爲して現はれ来り、ワッワッツと云う声諸共に、盛んに瓦石を投げ始め（丁度此会堂の前に川があつたから、其川より瓦石を運んだものであつた）直ぐに軒下に掲げある提燈を破り、家の内に釣しあるランプを壊し、周囲が其の爲に真暗となるや、鳶口や鶴嘴などを以て会堂の前面を破壊し始めたが、其間絶えず大石小石を室内に投げ込む事、無数なるが故に、我等信徒は皆ヂツト壁に附^つ着て、其の危険を避けて居たが、中には石に当つて負傷したのも二三人……兎も角もそんな状態で、出る事も逃げる事も出来ないから唯だ／＼黙して祈禱するばかりで居た……」
（注）

と記録されている。

教会側はこの暴挙にめげず、殉教の決意を固めた介石の下で金曜祈禱会を開催、壮年信徒と共に順正女学校長福西しげ子に引卒された女生徒十数名を加えて襲撃を待った。

当日押し寄せた群衆の狼藉は前回を上廻る勢いであつたが、門前に出た介石の捨て身の説教に氣押された傾きで、小一時間、対峙のままに経過、この間事態の通報に驚愕した県知事の機敏な措置により、群衆は解散、事後首謀者は免官となり事件は落着を見た。介石当夜の熱弁は

「……『予輩^{こはい}は殺されても恨むる所はない。耶蘇は十字架に懸けられたが、少しも懸けたものを恨むる事なく、却て其者の上に天の祝福を祈つた。予輩も不肖なれども、決して恨むる所なく、又殺されたからとて其下手人の所刑を望まない、故に諸君に於ても、一人や二人で殺すことなく、只だ／＼一所に集つて石を打下して殺し給へ……其代りに今云ふ如く、予輩をして今少しく語らしめよ』と一生懸命叫んだ所が、敵人であつたか、弥次馬であつたか其れ

は分らぬが『行るべし、行るべし、待つてやる、確と行るべし』と往来より怒鳴つたものがある、スルト今まで騒いで居たものも静かになり、其れで少しく予輩の説教を聴くこととなつた。因て予輩はサア此處だと力を入れて、其れより神の存在、靈魂の不滅、靈界の消息を説き……^(注8)云々。

と追憶されているが、切迫した情景を抜き去つて見れば、これは当時のキリスト教弁証の常型と考えられてよい。たゞ介石は当夜を境として咽喉を害ね、次いで肺炎を併発して音声不通となり、任を古木虎三郎に譲つてこの地を去り、「福音新報」主幹に迎えられた。

(三)

「福音新報」は明治期キリスト教ジャーナリズムの最初の結実である「七一雑報」(明治八年十二月創刊)の後身である。

欧化主義期を迎え、内にはリバイバルの熱氣をたゝえたこの時代のキリスト教界の隆昌を支えたものは、当時きびすを接するように創刊された「六合雑誌」(明治十六年「警醒社」)「東京毎週新報」(同年、同社、明治十七年「基督教新聞」と改称)「女学雑誌」(明治十八年七月)等の教界ジャーナリズムである。それぞれ独自の編集方針をもち、その経緯を貫くことを身上とした。「福音新報」主幹、介石も亦然りである。

彼はその編集方針の第一に「聖靈の作業^{わざ}」を置き、聖靈の経験^{けいけん}を有せざるものは眞の信徒にあらず、とまで極言している。もともと介石は独特の靈性の持ち主であり、祈禱^{きと}應驗^{おうえん}の実証を信じた。高梁教会時代の伝道回顧には、祈禱による少年の蘇生や、病者の快癒についての記事が見える。横浜時代、宇宙の中に遍在する神の「意匠」に刮目し、のちダーウィンの進化学説に触れて素朴な意匠論に依憑したその神観を破壊された時も、彼は遂に祈禱を廃してはいない。後年「道会」を組織するに至る時も、彼はその靈性を枯渇させることが全くなかった。この点が彼に基督教か

らの離反（背教）の自覚を与えなかつた点であろう。後年（明治三十二年）彼に「総合的基督教」という著があるが、彼は聖霊をもってキリスト教（神秘的）の「本尊」となし、自らの経験を次ぎのように書いている。

「…諸君が基督教の信者になつて経験を積まれたならば実に妙なことがある、私共経験があるがチャント端座し瞑目して罪を悔ひ神に祈禱をして自身の心を平かにして居ると云ふと自づから聖霊が降つたというのだから、そうすると風が吹く如く天外より頭に這入つて来るものがあります。奇態です。何だか魂に触れるものがある、ズット坐つて居る中にどうも魂が風で払われるが如く何か暖かい物が這入つて来て魂の冷たいのが暖まるように自から腹が実して生命が出来る様になる。夫をば聖霊の降つたと言う、神様が宿る……是は一種特別な基督教の賜と信じて居ります。……」

右の記述は一種の「見神道」を思わせる。同時代人としての綱島梁川の「見神の実験」と類似したものを感じさせるが、ここでは詳論を控える。

介石の抱負は壮大で、彼はやがて「福音新報」のような月刊規模の小誌にあきたらず、日刊紙の創刊を企て、今村謙吉、土居香国、伴直之助らとはかり、「太平新報」を発行したが、計画の杜撰さに崇られて僅か三カ月で「寂滅」小崎弘道・植村正久らの興した「基督教新聞」主筆に迎えられた。前任者浮田和民が同志社教授として去つた為もある。明治二〇年春であつた。

介石が「基督教新聞」にあつたところ、旭日隆昌の氣運にのつたこの国のプロテスタントにとって、その體質を問われるような二つの出来事が起つた。すなわち(一)、一致組合両教派の合同問題、(二)いわゆる「新神学」問題である。

(一)について言えば、明治初年日本のキリスト教会を設立するにあたって、宗派の弊におちいらぬ「公会」制が在日ミッシヨナリーズの間で協議され、これにあづかつたのが早くより布教に當つた一致教会（改革派・長老派）、および組合教会（米国伝道会社、アメリカン・ボード）の関係者たちであつた。両者はそれぞれ日本伝道の主役を関東

と関西において領ち合いつつ明治十年代の教勢伸張に大きく貢献してきたが、たまたま明治十九年三月、両教会の代表者が会して合同が議せられるに至った。両派の合同は「公会」に見られる無宗派主義の再確認であり、さらに合同は日本の伝道をより強固に又自立的に推進するべき跳躍板と目されたため、両者の合同気運は急速に高まった。一致教会はインブリー、押川方義、井深梶之助、植村正久、吉岡弘毅を委員にあげ、組合教会はD・C・グリーン、横井時雄、松山高吉、金森通倫、宮川経輝をえらんで合同のための憲法及び信条の作成に取り組み始めたが、新島襄を総師と仰ぐ組合教会側に曲折があり、一致教会側の譲歩にも拘らず、合同は遂に蹉跌した。^(注10)

介石は積極的な合同推進の論説を張ったが、合同の蹉跌は彼の信仰生涯に重要な変化をもたらす一因となり、平素欣慕した新島襄への信頼はあとを払った。この時期新島をもって「政治家」と目したのは恐らく彼一人ではあるまい。介石がいつごろから彼在来の信仰を動揺せしめたかは詳らかではない。彼の記録に徴して見てもそれぞれ述懐の角度が変わっていて確めがたいが、心とは急速な変化よりも緩慢な動きの中に曲折を秘めているものであろう。後年の発行にかかる「道会詩集」(昭和四年六月)を見ると、彼の信仰の転回が、「福音新報」時代に遡って記録されている。曰く

「啾々吟

王陽明

智者不惑仁不憂。君胡戚々眉雙愁。信步行来皆坦道。憑天判下非人謀。用之則行舍即休。此身浩蕩浮虛舟。(略)人生達命自洒落。憂讒避毀徒啾々。

此れは実に有名な王陽明の詩である。而して予輩の一生に、大変化を来らした詩である。今より二五、六年以前の事であつた。当時予輩は大阪に居て、基督教主義の雑誌『福音新報』に従事して居たが、色々と基督教に就て疑問が起つて来た。そこで基督教は真理としても、現今の教法がよろしくない。無暗に罪惡呼りを為して、酒は一滴

飲んでも罪である。烟草は一本喫ふても宜しくない、イヤ日曜日はかうして守らねばならぬ、信者たるものはこう言う風に行動せねばならぬのと唱へて、無暗に信者を縛り上げ、威し上げ宗律を以て圧抑するから信者は皆青くなりて瘦せ衰へ、道を歩むにも俯いて歩み、人と言うにも横を白眼で言い、神経極めて過敏になり、始終不景氣の顔色を呈して居ることに気がついた。而して此処に気が着て見ると、是れは他人の上のみでなく、更に我身の上にも、其の弊毒が及んで居ることに気が付いた。予輩は小児の時分から一向泣いたことの無いと云はれる位の樂天家である。然るに基督教を信じてより顧みれば、大分不景氣な人間になつて居る。しかのみならず何だか窮々齷齪として、伸々とした所が無くなったのみか、西洋人の真似して、表面ばかりを繕う様な卑少な量見の人になつて居るようである。此れではないけない。これは一つ考え直して基督教の真面目を悟得せねばなるまいかと云ふことに気が付いた。ソコで：人物の崇高雄大と云ふ点に於ては儒仏の方が遙かに優つて居るかも知れぬなど考え始めた。今日になつて見れば、実に幼稚な発明であるが、当時には実に独創の大見識であつたのである。ソコで先ずかねて安井息軒の塾で、其名を轟かしたと聞て居た吉岡弘毅君が、其時丁度大阪に居て、ある基督教会の牧師をして居たから、一日吉岡君を訪ねて吾輩の意見を語ると、吉岡君が其れは如何にも御同感じゃ、王陽明の詩にこう言うのがある。この位脱然洒落の境涯に至つて居るものは、今の基督教教会には一人もあるまい、否こんな処を狙ふて居るものさえない様であるとの談に、早速其詩を拝見したのが、此の啾々吟である。

予は此詩を読んで聞かされて、又自らも繰返し繰返し読んで見て、覚えず膝を打ち、声をあげて大に叫んだ、『吉岡君、僕の尋ねて居る道は此処である。……』
(注11)

同じころ、彼は新島襄を介して押川方義と出会っている。押川は横浜バンドの一人であり、性剛直、「樂天家」を自称する介石と肝胆相照す交りを生涯にわたって持った。押川も亦合同蹉跌を契機として、正統主義を大きく逸脱するが、彼はこの国の基督教を「小乗的」となし、人格修養にかけては武士道に長を認めて「大乘的」の道を求めた。

宣教師派に見られる宗派の固陋とその保守的神学、偏狭な戒律主義とそこから生まれる偽善に反発する者の共通に抱いた心情であろう。この心情と(二)の「新神学」問題とは微妙に交錯する。

(四)

「新神学」とは明治十年代後半の欧化主義期に、この国に布教されはじめた「ドイツ普及福音教会」(明治十八年、スピネル)、「アメリカン・ユニテリアン協会」(明治二〇年、ナツプ)、ユニバーサリズム(明治二二年、ペリン)等の総称であつて特定の神学体系を指すものではない。あえて「新」と冠せられた訳は、幕末から明治にかけて開教され、殊に日本人に強いインパクトを与えたキリスト教の主流が、アメリカン・ピュリタニズムを母胎とする諸宗派だったためであらう。

初期ミツシヨナリーズの持ちこんだものは、神学というよりピュリタンの源泉にかえろうとする情熱であり、その信条はきわめて保守的、聖書理解も字句の一句一句が神の天啓であるとする「Verbal Inspiration逐語靈感」説に立ち、どのような自由解釈も頑なに拒もうとした。彼らの多くは十九世紀に於て高まった自由主義的潮流と本国に於て抗争し、又その抗争のエネルギーこそ、彼らを駆つて海外伝道にかりたしたためたものであつた。介石の述懐を見る。

「当時我輩の教えられたるキリスト教はこうであつた。人は罪に孕み罪に生まれ、アダム、エバの罪を犯したるため、生れながら罰せらるべきもので有る。人は何の善業をもなす能はず、唯だ神の恩恵マメルシに由て救はるのみ、而してキリストが此の罪人に代りて贖罪の役をなされた故、救はるるのである。如何に神が人を愛し給うとも、キリストの身代りなくば人の罪を赦すことが出来ない、否でも応でも人を限りなく刑罰に陥し入れねば、神の律法が立たぬとの事であつた。

今より考うれば克くもこんな無道理な没條理な馬鹿／＼しい神学を信じられたと思う程であるが、當時は確かに

之を信じた、又その通り人にも説いたのである。」^(注12)

「ドイツ普及福音教会」は自らを「學術的」と謳ってドイツ神学史上の所謂テュービンゲン学派の方法を継ぎ、當時抬頭した比較宗教学を骨子とする聖書の文献批評（高等批評）を紹介、素朴な天啓論に立つ保守的神学を批判した。「ユニテリアニズム」は人間の理性や道徳心を規範として三位一体説に基く従来のキリスト教に対抗、人間の救済を倫理的聖化に求めた。共に欧米における近代主義を代表し、宗派の偏狭をきらい、又歴史的信条の儀式的伝承を重んじなかった。当然キリストの神性は否定される。この点ユニバーサルイズムも同じである。この「合理性」に立つ新装のキリスト教は、福沢諭吉・外山正一・加藤弘之らの啓蒙思想家たちには強い関心を抱かせたが、初期来日のミッシヨナリイズは極端な嫌悪と侮蔑を以て之に酬いた。彼らは自己の庇護の下に育った羊の群れが、豺狼に襲われることを恐れる牧者のように身構えている。しかし波乱は忽ち教界を襲った。

最初の渦紋は明治二十二年、万国基督教同盟会のウイシャードを招いて開催した第一回全国夏期学校（会場校同志社）に於いておこっている。講師の一人として立った組合教会の論客小崎弘道は、当時教界に話題となっていた聖書をめぐる新旧の論議に自己の立場を明らかにしようとし、「聖書のインスピレーション」と題して語った。小崎はこの日に先き立って新神学、就中ユニテリアン派を批評し、智慧と知識を分外に尊重するは幼児の心を知らざる反基督教的态度であり、又悔改の門をくぐらずして神の前に出でえず、と述べているほどであるから、宗教性の留保については独自の見識をもっていた。それだから聖書の文献批評の限界について触れようとこころみたのだが、かたわらG・T・ラッドの聖書論に基いて、「聖書のインスピレーション」とは、記者の精神が聖霊に感動して向上聖化したままで、無謬の真理は望むべからず、と「逐語靈感」を批判した。^(注14) このため同志社の宣教師J・デビスは激怒して講演記録からの削除を叫んだ。当時のミッシヨナリイズの過度の緊張ぶりを示すエピソードであろう。

「新神学」に対する教界の指導者たちの反応を、介石の目を通して映し見ると面白い。

先ず横井時雄は「チト飛び過ぎる位の進歩家」であつたため懷疑に陥り始めた筆頭であり、次いで是最もドイツ語に精通し、高等批評について早くから知っていた大西祝。次ぎに「學術家」の内村鑑三が挙げられている。植村正久は「初めより訳の分らぬ態度」をとり、保守派に会えば新説をふりかざし、進歩派に対しては故意に旧説を持して言争つたとある。小崎は新旧兩派に同情を有し、折衷の立場を持し、これらに加えて平岩愼保・木村駿吉が本郷の「基督教青年会」に集まって喧々諤々、腹藏なく議論を交わすさまは、「痛快至極」であつたと介石は言っている。この会合は「洛陽俱樂部」と名付けられ、バイブル論・基督論・保羅論・十字架論・新學術論・新哲學論、にわたつたが、つねに問題を提起するのが植村、之に答うるのはつねに大西、と記載されている。大西祝は最若年にしてやがて次第に重きをなし、介石を懾伏せしめた唯一人者であつたようである。介石自らは靈性、祈禱應驗の経験をもつて宗教の真髓と主張し、新知識派と争つたが、大西の影響もあつてやがて「高等批評」を受け入れ、「基督教新聞」を去り、「予一個の基督教」を求めて煩悶する。その彼の前に拓けた道は教育事業であつた。

日屋根安定氏の回想によると、介石の人物像は「英雄頭を廻らせばすなわち神仙」を思わせた、と見える。好んで古今東西の英雄を論じ、天下を腹中におさめるという感慨をその眉宇に漂わせていたともあるが、その肖像を見ても風貌悠揚として東洋豪傑流である。しかし経営の才など微塵もなく、つねに己れ一個の風雲に乗じて彷徨を重ねた。その人生行路にはそのためどこか喜劇的な趣きがつきまとはなれない。

明治二〇年の秋、押川方義が参画した山形英学校の教頭に迎えられたが、当時の知事兼校長柴原和と衝突、わずか半年で放り出してしまつてゐる。次いで新潟の北越学館に移る。そしてここでも学校の存廃に関する大喧嘩をやらかしてしまつた。

北越学館は阿部欽次郎が私財をなげうち、キリスト教を基礎にした民衆の大学を目標として建設され、クリスチャン県會議員加藤勝弥が経営の責任をとつて明治二十一年に発足した。同地の組合教会やアメリカン・ボードとの協力

関係は篤かったが、もとより所謂ミツシオン・スクールでなく、後援は地元有志によったものである。当初内村鑑三が新帰朝者として校長に迎えられたが（五月）、彼は日ならずしてアメリカン・ボードの宣教師たちの教育方針、すなわち彼の言葉を借りれば「宗教の形式」に拘泥する態度、及びこれに追隨する組合教会牧師成瀬仁蔵らと衝突、これを辞し（十二月）去った。介石が招聘されたのはこの直後でありいはば火中の栗を拾うべき役割が期待されたわけであろう。しかし介石は却て火勢に油を注いだようである。

内村が残した渦紋を今日の視点から吟味すればこうであろう。即ち日本のキリスト教主義学校の主流をなすいわゆる「宣教師学校」は、聖書教育をととして学生をキリスト教に改宗させ、礼拝を盛んにして直ちに教会の教勢を増加せしめ、それを伝道の成果の唯一とする教育方式であった。内村はむしろこのミツシオンスクールの常型を排し、キリスト者の誠実を以て真実の教育を行なうにある、としたのである。^(註17)

介石は自覚的ではなかったけれども、内村の精神を継承した。それも粗暴とも思える形においてである。介石は当時の情景をこう書いている。

「当時北越学館の騒動に関して、三種の党派があつた。第一は宣教師派で、而して此宣教師派には日本人の基督教信者と、更に改進黨の分子が加つてゐた。第二は内村派で、この内村派に未信者なる自由党の壮士連と、その首領株が加つて居た。第三は加藤校主を始めどちらにも與せぬ二三の教師連であつた。加藤君は自由党である。然し又基督教信者である。故に其の中間に介して、実に困つたようである。ソコで余は其の三派の中へ割り込んで行つたのであるが、どちらかと云へば、先づ宣教師派即ち基督教派より招聘せられたのであつた。然し予には予の意見があつたのである。」^(註16)

介石は就任にあたって宣教師派の人々を呼び集め、教務と事務の一切の掌理を宣言、人々の危惧の視線を集めながら一世一代とも言える校務に當つた。

彼が先ずやったことは(一)、全校による礼拝祈禱の全廃、(二)、館内の日曜学校の廃止、(三)、毎朝の講話は精神教育を眼目とし、宗教を説くべからず、の三条である。宣教師派は瞠目し、憤激した。しかし介石には一個の見解があったのである。別の記録を見る。

「当時我輩の考は、今の宗教学校の如きは駄目である。宗教を拡張するを主眼として、傍ら教育するのであるから、其の猾^ずい考が生徒の上に禍をなす、宗教拡張の方便としたる学校でなく、純然たる理想的の学校を興そうと企てた。其の主張は、学校に於て一切祈禱をせぬ、バイブルをよまぬ、説教もせぬ、学校では誠心誠意、英語の所謂シンセリチーを主張し、たとい宗教を信ぜずとも、人は俯仰天地に愧じざる人格を養なわねばならぬ、苟くも自ら省みて疚ましきようでは男子でない、大丈夫でないという主意で、毎朝祈禱やバイブルをやる代りに修身講話を始めた。」^(注18)

介石の胸中には王陽明学の「良知良能」が宿っていた。それを校是として百事断行を決意した彼は全校の生徒に向つて校則の全廃を告示、「苟くも自ら顧みて、悪いことは一切なさず、唯だ善と思うことをなせ」と附言した。久しく戒律主義に苦しめられていた介石らしい反動である。介石は当時二十九才。青年客氣とも言える改革であつた。

忽ちおこつた大混乱については触れずもがなであろう。宣教師は次ぎ／＼と退任し、生徒の風俗は一時「無政府」状態となつて飲酒喫煙・放歌高吟は横行したが、介石の「良知良能」は微動すらせず、彼はここに二年を費している。校風は次第にあらたまり、その独特の精神教育の結果は、後年キリスト教界にユニークな貢獻を果す加藤直士、木村清松の如き人物を生んでいる。彼らは共に介石のリンカーン仁に感奮したものである。^(注19)

この期間、彼は新潟県下を巡回し、独特の精神講話を試みているが、彼と宣教師との溝は遂に埋めがたいものとなり、あまつさえ新たに新潟教会に赴任した堀貞一は学館内の基督教信者の生徒を勧誘、阿部欽次郎も之に与して介石に反抗、曲折ののち明治二十四年の春、介石は廃校を宣言して「孤劍飄然」というような態で又々東京に帰つた。教会ドン・キホーテの悲哀といえなくもない。

(五)

介石を再び東都に迎えた当時のキリスト教界は、内村鑑三の「不敬事件」をめぐる国粹主義陣営の圧倒的な反撃にさらされた時期にあたる。介石は自らのキリスト教信仰が当代のキリスト教の何れに定位するか見定めなければならなかった。彼は当時のキリスト教徒の「旗色」を次ぎのように分類してみる。(1)保守派一名信仰派、(2)進歩派一名学究派、(3)道德派、(4)神秘派、(5)宣教師派、(6)西洋派、(7)東洋派、(8)未来派一名厭世派、(9)現世派一名樂天派、(10)義務派、(11)愛情派、(12)利用派、(13)天秤派、それぞれ介石は諧謔にみちた分析を加えているが、これらのうちには彼自身の信仰の立脚地を遂に見出せなかったようである。

「然るに茲に異様の軍あり。一層高き山上より、遙かに此等の各陣を見下し、傍らを顧みて笑うて曰く、嗟呼何ぞ彼等の偏少なるや。夫れ道と真理と生命とは天に滿ち地に充ち人に充ち、而して縦横活如たり。永遠一時、諸派一流。而して万物遂に円満に帰すと、宇内を呑んで一息す。吾人は之を呼んで円満派という。」(注20)

右の引用は介石当時の心境を映すものであろう。北越における教育事業必ずしも意に充たなかったとは言え、介石は尚日本のどこかに己れの志を展開する場所のあることを信じ、文部大臣秘書官であった吉田作弥を介して、文相井上毅に自己の所信を披瀝した一書「我党の德育」を呈し、高校教授たらんと試みたが、「耶蘇信者」の故を以て拒絶された。その落胆は深かったと思われる。その彼の失意を救ったのが基督教青年会幹事丹羽清二郎である。失意の上にさし当つての糊口に窮していた介石は、ここに講師たることを引き受ける。しかし青年会も亦その財政を外国に依存する組織であった。多少の問題を予感しないではいられなかったことだろう。

しかし介石の精神講話は大成功であった。彼はここで満五ヶ年、すなわち明治二十五年より三〇年半ばにかけて常

時約五〇〇の会衆に向かつて語っている。基督教伝道はせず、「英雄豪傑の伝」二百五六十をなしたとあるが、果して幹事スキフトと衝突し、理事会決議によって解任された。覚悟の前だったが、いよ／＼これで目が醒めた、予輩も自今は人の土台に立たぬ。「たとい斃れても独立独歩で行かねばならぬ。」と介石は決意している。

明治思想史上、明治三十年は産業革命をへて台頭する社会問題開眼期にあたる。片山潜が神田にキングスレー館を開いたのはこの年の三月であるが、その設立発起者の中に松村介石の名を見出す。又四月結成の「社会問題研究会」にも参加しているが、介石が社会問題に対して独自の見識をもっていたとは思えない。むしろ三〇年代をとおして彼は「万国興亡史」三巻をはじめ文筆活動にそのエネルギーを集中している。雌伏時代とも言えるだろうし、摸索時代と考えることも出来よう。独立独行を決意はしてもさし当り何を拠点にするべきか。彼の周辺をふと見渡せば、かつての盟友たちの身上は著しく変化していた。明治三十六年に公刊した「事感小集」には「変説か変節か」と題した文章がある。彼はその中で変節を罵られた盟友のために弁護を寄せている。

「横井時雄君、頃日逋信省の官房長となれり、此に於てか：口角泡を飛ばして罵倒する者曰く、金森と市原は素町人に墮落し、徳富と竹越とは女郎に變じ、由来我宗教界を汚したるもの尠らず、而して今や横井の官界浮泳の高襟党に化するを見る、遺憾何ぞ尽くる所あらんやと。是れけれど少し壯活潑の青年に多し。……（然れども）政党に入り官界に歩む、何ぞ之を墮落したりとのみ言うべけんや、凡そ大日本今日の患いは、国家大機関の運轉其の宜しきを得ざるにあり、於此乎、予等の如き腥坊主も憂心忡々常に政界を瞻顧して去る能はず、徳富竹越諸君の如きも、何ぞ茲に憂へなしと言うべけんや、況や横井君の如きを指して、直に之を墮落者に数う。抑も亦輕斷躁議なりと言はざるべからず、余は満腔の同情を以て横井君を祝す、而も其の祝するや、君の心事を知ればなり……」^(注21)

右の引用文を見れば介石自らも政界入りを志したことがあったらしい。しかしそうさせなかったものは社会警世が自己の本分であるという自覺と、さらには彼の中にある独特の靈性であった。

一時鎌倉に逼塞して自立の方策を模索中、介石はその宿阿であつた肺を深く犯され、その夫人も共に病んでいるのを高田耕安に告知されて動揺する。ために神に祈る生活を再開するうち、一夜烈しい霊の黙示を浴びた。

「祈ったり考へたり、考へたり祈ったりして居た所が、天外俄かに声ある如く覺へて『汝は今更何を考へ、何をか祈つて居る。汝はかつて箱根山上に於て、一生其の身を伝道に捧ぐと、誓つたではないか。然るに汝は今や其の誓を忘れて社会教育なんぞに従事せんと計画して居る、見よ、日本の宗教界を見よ、仏教はダメ、神道もダメ、而して儒教は衰え、基督教は行詰り、劣等の迷信的宗教のみ、其の威を逞しくして人心帰着する所を失うて居る有様ではないか。此の時に當りて真に活ける宗教を以て任すべき者は誰ぞ。』とその声雷の如く吾が心の中に響き渡つた。^(註22)」

この日から彼の心は定まった。「純宗教」の道に生きようと決心した瞬間から、介石の病氣は快癒した、という。

直ちに東京に出、小崎、海老名、宮川、植村らの旧友と会談、平岩と組んで中央会堂の講壇を担当したが、やがて渡辺国武の援助により、内務省前、商工中学の二階で毎日曜の集会をなし、独立独歩の伝道に一つの機軸を得た。当初この集会は「日本教会」と呼称されたが、これが「道会」の雛形である（明治四〇年）。

「日本教会」は介石の雄弁によつて毎回三〇―四〇名の入会者を加え、常に満堂の盛況を呈した。明治四一年機関誌「道」を発行。次いで綱領を制定した。すなわち

第一は神を拝すること。

第二は徳を修むること。

第三は隣を愛すること。

第四は永生を信すること。

綱領の制定について介石は次ぎのように言っている。

「凡そ宗教として信ぜんには、確固不動のものでなければならぬ。而して右の四条は古往今来を通じて一定不変の

ものである。かの変わるべきものは、個人の信仰と議論に委せ置き、我が日本教会は此の不易の大真理を奉ずるものの団体として、新たに組織せられたのである。かかるが故に天主教信者も、希臘教信者も、ユニテリアン信者も入会し得る、否な回々教徒も無試験で入会する事が出来る。ソクラテス信者も、儒者も、仏者も、神道者も苟も神を信じ、修徳に志し、愛隣の為に尽し、而して死後の生命を信ずるものならば、何人も会員たるを得る」^(註23)

おどろくべき無限抱擁性というべきであろうか。

しかし注意深く綱領の一つ一つを吟味して見れば、それを受け入れるのは容易なことではあるまい。例えば「永生」について介石はどう考えているのか。

「私が思うのに所謂儒教は自ら修めるに正心誠意と言い、虚霊不昧と言った。御承知の通りに己が心を決定して居るといふと、本当に精神が満つる、而して後に天地の如くなるのはマア仏教で言つてもよからうが、万神教で言ふと天地の中にある神に接して恍惚と酔う、スピノザが天地に酔うたのはスピノザの汎神教であるが、自ら天地の中に接して神のような心になつて清い美しい心になつてくる。此れが神秘的基督教で言ふと神の聖霊が来る、天地の中にある神の心が人の魂の中に宿つて這入つてくる。……こういう所の神秘的基督教になるのが一家クリスチャンの頂上であります。ここへ這入ると初めて生まれかわるという、尤も生れ変わつたから直ぐに聖人君子になるのぢやない、之を仏法で言ふと大悟徹底と名付る。大悟徹底ということは一度悟つてしまつたらモウおしまいというものではない。段々進み行くのであります。基督教も同じであります、生まれ変つただけではいけない、段々生長してドシ／＼やつている中に、永遠限らない生命というものがある、死んでも尚、神と共に行くという道があります」^(註24)

……
」

何となく納得、と肯かしめるような語り口である。要するに四つの綱領は、それ／＼の要素が纏絡し合う一種の円現（エンテレヘイア）をなしていて、倫理綱領のように瘦せた骨格のものではないことが少くともうかがえる。介石

は四綱領を「心象の証し」としてさらに「道友会」をおこし、政治界、教育界、宗教界、実業界より会員を募り、互いに精神的交流を結ばしめんとした。その会員の中には渡辺国武、大隈重信、島田三郎、尾崎行雄、床次竹次郎、井上友一、森村市左衛門、増田増蔵、鎌田栄吉、渡辺千冬、押川方義、田村新吉、村井知至、重山重義ら各界のオピニオン・リーダーが目白押しに名を連ねている。日本教会は又、心靈治療を以て聞こえた藤田靈斎を招いて「養真会」をおこし、各地に（山口県長府・横浜・岐阜）支部が結成された。その勢いは明治末年の一種「不安の時代」を背景に爆発的に拡大され、大隈重信、田中正造、三宅雄二郎、新渡戸稲造らの同情のもとに錦輝館に「大気焰」をあげ、活動は婦人問題、貧民救助にまで及んだ。それと共に日本教会は次第に基督教色を脱し、遂に「道会」と改称するに至ったが、その次第は介石の基督教理解にあった。介石は基督を以て孔子、ソクラテスと同じ聖人の位置におき、これを以て敢えて基督教なりやを芝、唯一教会ユニークチャーチで開かれた自由派基督教の会合に問うたが、海老名弾正をはじめ安部磯雄、岸本能武太らの否定にあつて、「それなら」と基督教を脱したという。介石の無邪気さのなせるわざであろう。

「道会」は組織の才に欠けた介石の放慢、磊落な性格もあつて種々曲折があるが、それについて書くことの煩をこの稿ではさける。

「道会」は大正期を生きのび、昭和十三年、介石の死によつて閉じられる。大正十五年発行の「道会四書」を見ると、それは「大学」「中庸」「論語」「孟子」となつていて、基督もソクラテスも出てきていない。再び比屋根氏の回想を借用すると、晩年の彼は渋谷に「拜天堂」を建て、太鼓を打ちならして開会を報じ、道話三昧の明け暮れの中に、競争心も名誉心もなく、光風霽月、遂に「神仙伝中の一人」に列した感があつたという。

おわりに

この稿執筆の直接の動機は、東北大学の大内三郎氏が、「日本の神学」最新号（一九七四年刊）の誌上に、日本プロテ

スタンチズム研究史上、三並良、押川方義らを始め松村介石についての論評が殆どない、という指摘をされている一文に促がされたものである。かつて介石の「信仰五〇年」を読み、その洒脱な文体と、無垢とも言える心性、失敗を失敗として認めることをは、からないうりゾントルな精神の位相に興味をそそられたことのある筆者が、資料の網羅的考証という地道な作業を省き、短時日にして書き上げたものであるだけに粗雑のそしりを甘んじるほかはないが、以て介石研究への一歩を築くことにもなれば、と思う次第である。

介石の著書は夥だしくある。もつとも人口に膾炙されたという「立志の礎」をはじめ、「リンカーン伝（アブラハム・倫古龍）」、「基督之心」^{（注25）}「保羅伝」^{（注26）}「デビニチー」^{（注27）}「修養録」^{（注28）}「我党の徳育」^{（注29）}「婦人のかがみ」^{（注30）}「信仰之道」^{（注31）}「人物論」^{（注32）}「国民之覚悟」^{（注33）}「学生之錦囊」^{（注34）}「基督教問答」^{（注35）}「寄談集」^{（注36）}「社会改良家列伝」^{（注37）}「伊太利一統史」^{（注38）}「総合的基督教」^{（注39）}「学生の前徒」^{（注40）}「万国興亡史」^{（注41）}「修養談」^{（注42）}「養心録」^{（注43）}「ナポレオン」^{（注44）}「人物短評」^{（注45）}「事感少集」^{（注46）}「欧州近世史」^{（注47）}「ソクラテス」^{（注48）}「両ピット」^{（注49）}（発売禁止）^{（注50）}「修養の道程」^{（注51）}（上・中・下）^{（注52）}「不朽の道」^{（注53）}などが明治期に公刊されている。筆者が手にしえたものは右の中——線を付したものであり、他に警醒社の「信仰五十年」^{（注54）}、「回顧二〇年」^{（注55）}、さらに介石の文を掲載した「六合雑誌」^{（注56）}「三籟」^{（注57）}等の諸論文、及び大正期公刊の「道会四書」^{（注58）}「道会詩集」^{（注59）}昭和期の「道会語録」である。

これらの著作は介石の思想と宗教性を検討する資料であることは言うまでもないが、同時に日本基督教史の検証にとつても見逃しがたい言表資料にみちている。

介石はたとえば内村や植村、小崎らが宣教師のもつピュリタンの偏狭と角逐しながらも独自の思想信仰の地平を開拓し、正統信仰の内側にとどまったのとは異り、躰きによってその軌道を修正し、遂に「胎内瞑想」^{（注60）}とも言うべき立場に帰った。彼は自らの立場を「頑」^{（注61）}にして「痴」とよんで憚らなかつたが、彼の身証した生涯の中に、その「頑」と「痴」を生み出さざるを得なかつた明治プロテスタンチズムの歴史的体質と限界がうつされ、今日我々が負わされ

ている日本キリスト教史研究に、一つの視角を提供していると思うのは、私のみであろうか。

〈附記。松村介石は一時森本姓を名乗っている。煩をさけるためこの稿では統一して松村姓にした。〉

- (注1) 「信仰五十年」 大正十五年九月、道会事務所、発売書警醒社、七頁
- (注2) 同二二頁
- (注3) 佐波亘「植村正久とその時代」第一卷三五一頁
- (注4) 「信仰五十年」五六頁、五七頁
- (注5) 同五十九頁
- (注6) 「回顧二十年」明治四十二年十月十二日、警醒社
- (注7) H. Ritter, A History of Protestant Mission in Japan. p 40-41
- (注8) 「信仰五十年」九五―九七頁
- (注9) 「総合的基督教」明治三十二年三月十二日、警醒社
- (注10) 海老沢亮、大内三郎「日本キリスト教史」(一九七〇年日本基督教団出版局)に大内氏が経過を詳論されている
- (注11) 「道会詩集」昭和四年五月二十八日、道会事務所
- (注12) 「回顧二十年」
- (注13) 「六合雜誌」明治二十一年六・七月号
- (注14) 小崎弘道「余が信仰の立脚地」明治四十年、警醒社
- (注15) 「教界三十五人像」昭和三十四年十一月、日本基督教団出版局
- (注16) 土肥昭夫「内村鑑三」日本基督教団出版局、一九六二年、七四―七五頁
- (注17) 「信仰五十年」二一八頁
- (注18) 「回顧二十年」

(注 19) 前出「教界三十五人像」

(注 20) 「三籟」第四号、明治二六年六月

(注 21) 「事感小集」明治三六年六月、警醒社

(注 22) 「信仰五十年」

(注 23) 「回顧二十年」

(注 24) 「総合的基督教」

(注 25) 「養心録」明治四十二年十月十二日、警醒社

Motoi Takamichi

Résumé

Kaiseki Matumura

A Lost Child of the Japanese Protestantism

The study of the history of the Japanese Protestantism has been extensive in recent years. The name of Kaiseki Matsumura, however, is not found in it. This is a serious matter for consideration because Matsumura was a unique existence, personally experience, for instance, the famous persecution of the Takahashi Church in 1884. He later became the chief editor of the *Christian News* (Kirisutokyō-shinbun), reflecting on it the influence he received from the liberal theology of his days. Eventually he was to leave the traditional Christianity and organized the Michi-no-Kai (Dō Kai), a Christian group with Confucian orientation and led his life as a social activist and as an educator. This is a small attempt to clarify him as a person and analyze his thought behind faith.